

東海農政局長賞

【 連谷校区 】

代 表 者：古 田 和 男

所 在 地：愛知県新城市四谷 9 7 1

1 地域の沿革と概要

新城市は愛知県の東部、東三河のほぼ中央に位置し、平坦部と山間部の接点となっている。面積は約 5 0 0 km²で県土の 9.7% を占めるが、人口およそ 5 2, 0 0 0 人で、県人口の 1% にも満たない。

市の中央部には豊川が南下し、これに注ぐ宇連川、巴川を始め多くの支流が流れ、木曾山系、赤石山系の標高 3 0 0 ~ 1, 0 0 0 m の



山々が峰を連ね、変化に富んだ地形となっている。このため、愛知高原国定公園、天竜奥三河国定公園の一部を始め、本宮山県立自然公園、桜渕県立自然公園など豊かな自然景観に恵まれ、四季折々の風光明媚な景勝地も数多く点在している。

こうした豊かな自然は、豊橋、豊田、岡崎、浜松などの都市部からも近距離にあり、人々の心と自然を結ぶ貴重な資源として、また、東三河平野一体を潤す水源地として重要な役割を担っている。

市の年間平均気温は平坦部で約 1 5 °C、山間部では約 1 2 °C と、比較的温暖な地域とやや冷涼な地域に分かれるが、年間降水量は平坦部、山間部とも 2, 0 0 0 mm を超える比較的雨の多い地域である。

この地区は市の北部に位置し、北は北設楽郡設楽町に接した山あいの地域であり、標高 8 8 3 m の鞍掛山の南斜面、標高 2 3 0 ~ 4 3 0 m の山懐に開かれた地区で、人口 4 0 0 名ほどが住んでいる。

連谷校区は、新城市立連谷小学校の校区として、主に新城市連合、同四谷の地区からなる集落の集合体で、昔から強いつながりをもった地区であり、現在でも地区運動会や消防団活動の単位としてのまとまりをもっている。

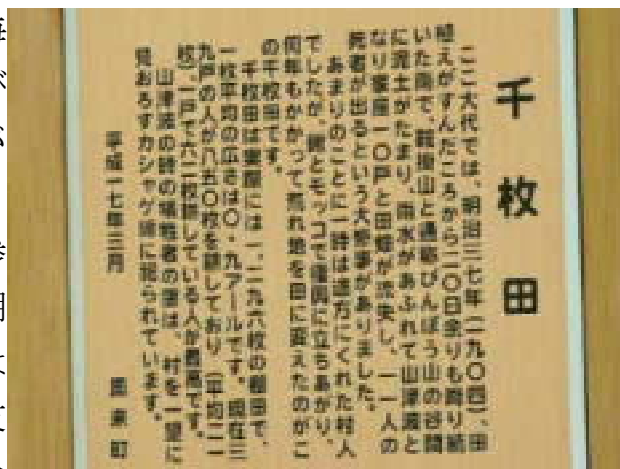
地区には信州古道の一つ「仏坂ふりくさ道」や東海自然歩道が通り、日本の棚田百選に選ばれた「四谷千枚田」などの観光資源や、市無形民俗文化財の念仏踊

りである「はねこみ」などの文化資源がある。

2 むらづくりの動機、背景

ア むらづくりを推進するに至った動機、背景

明治37年（1904年）7月、梅雨時の長雨と雨台風で鞍掛山と通称びんぼう山の谷間から大規模な山崩れが起こり、家屋10戸と田畑が流出し、死者11名を出すという未曾有の大惨事があった。土石流により沢沿いの棚田は壊滅してしまっただが、先人たちはこの不幸にもめげず、近隣の暖かい支援のもと、鍬とモッコで棚田復興に全力を注ぎ、わずか5年ほどで土石流で流れてきた石を使った頑強な石積みの棚田を蘇らせた。



先人たちの血と汗の結晶である千枚田を地域の人々は風化させることなく、地域外の人たちの力を借りながら、先人たちが残した偉大な財産である棚田を使命感を持って守り続けている。

国の減反政策が行われる前の昭和46年までは、1,296枚で耕作されていたが、減反政策や高度経済成長による労働力の流出などによって、年々耕作放棄が増えて、平成8年の耕作枚数は547枚（うち水稲作373枚）となってしまった。

耕作放棄が目立つ千枚田を何とかしたいと考えた住民が、平成6年に開催された「わかしゃち国体」の山岳競技が近くの新城市の宿泊体験施設「やまびこの丘」で開催されたとき、やまびこの丘のギャラリーで「千枚田写真展」を開催し、全国から訪れた方々に千枚田の美しさ、すばらしさを紹介した。

このときに、訪れた劇団「ふるさときやらばん」の一人が棚田の素晴らしさに魅せられて、平成17年に当地で開催されることになる「全国棚田サミット」発足のきっかけにもなった。

イ むらづくりについての合意形成の過程とその内容

連谷校区を中心として、「当地区の貴重な文化遺産である四谷千枚田を守っていこう」と千枚田を保存していくための組織として、平成9年1月に鞍掛山麓千枚田保存会が発足し、高齢や病気などで耕作ができない農家に代わって棚田を守る「田吾作」、都市住民とのふれあいを目的に農家の奥さんたちで構成される千

枚田売店の会「棚田っ娘」、全国棚田サミットの開催決定を受けて地元の若手で構成される「サミットお助け隊」や地元の連谷小学校、連谷敬老会、連谷公民館、連谷コミュニティが四谷の千枚田を中心とした活動を行っている。

ウ 現在に至るまでの経過

平成17年9月の四谷千枚田での第11回全国棚田サミット開催を目指し、保存会が中心となって景観整備等を行うのと前後して、棚田の美しさに共感した都市住民の援農グループ（河西さんグループ）、名古屋大学や黄柳野高校で構成される学生のグループ（稲作プロジェクトチーム）などのいろいろな支援グループが休耕田を復田したり、耕作を手伝ったりして、次第に昔の景色がよみがえってきた。

河西さんグループは四谷千枚田の中で一番多い40枚を耕作しており、秋には収穫祭を催し、地元の人たちや連谷小学校の子供達を招き、餅つきや五平餅を振る舞うなど、地域に溶け込んでいる。なお、この収穫祭は現在「田吾作」が引き継いでいる。

作業道が狭く、耕耘機の出し入れすら危険な状態での農作業の中、この多面的機能を持った千枚田の保全の必要を感じ、平成13～14年度に「ふるさと水と土ふれあい事業（国庫補助）」で景観道や周辺環境の整備を行い、年間1万人以上の方が訪れるようになった。

平成15年9月、岐阜県恵那市で行われた第9回全国棚田サミットにおいて、2005年「愛・地球博」の開催年に、第11回全国棚田サミットが四谷地区で開催されることが正式に決定した。このときから保存会が作成した広報誌「千枚田だより」を発行するとともに、鳳来町のホームページの一角にも「四谷の千枚田だより」を掲載した。

サミット開催が近づくとつれ周辺住民等も盛り上がり、「棚田っ娘（地元女性の直売所グループ）」、「田吾作（千枚田を耕す会）」、「サミットお助け隊」などの支援組織が次々発足するとともに、地元連谷小学校においても総合学習の時間「くらかけタイム」において米作りなどを実習しながら、食育の推進にも力を入れ始めた。

一時、373枚まで減った水稻作付田も、援農グループの参加で現在では420枚まで増えている。

3 むらづくりの推進体制

ア 当該集団等の組織体制、構成員の状況

連谷校区は、新城市の行政区連合（61戸）と四谷（60戸）からなり、連合

の「連」と四谷の「谷」を合わせて「連谷^{れんこく}」と呼ばれる地区で、コミュニティー活動や公民館活動の単位であり、小学校の校区とも重なっている。

イ 当該集団等と連携してむらづくりを行う他の組織、団体及び行政との関係

この地区のむらづくり活動は、数多くの団体、グループに支えられており、これらの組織間の総合調整機関として、連谷校区が位置づけられる。

地区内の組織としては、千枚田の保存を中心的に行う「鞍掛山麓千枚田保存会」、運動会や文化活動を行う「連谷公民館」、地域の環境整備や広報活動等を行う「連谷コミュニティー」、小学校の親と教師の会「連谷小学校PTA」、女性直売所グループ「棚田っ娘」、千枚田を耕す会「田吾作」（一部隣接地区住民を含む）やサミット開催を支援するために設立され、農作業やイベントの手伝いをする若手有志による「お助け隊」などがあり、相互に連携を取りながら活動を行っている。

なお、市役所鳳来総合支所経済課には、地元ではなかなかできないこと（「四谷千枚田だより」の電子版をホームページに掲載するなど）を依頼している。

また、教育委員会とも共催して生き物観察会も開催し、子どもたちに千枚田の自然と多面的機能について教え、子どもたちもタニシやドジョウなどをさわったりして大好評であった。

ウ むらづくりに関して、各集落の住民の当該集団等や連携する他の組織、団体との関係及び参加状況

高齢化や不在地主の増加等で増え続ける耕作放棄地の解消には、地元農家や田吾作だけでは力が足りず、古くから耕作を手伝ってくれる「河西さんグループ」や平成15年から活動を始めた「稲作プロジェクトチーム」の力を借り、また、これらの組織との交流の中から、学生の栽培体験や農作業の手伝いなどによる食育の推進が図られているとともに、棚田に魅せられた地域外の人を借りて地元の人と都市の人との農業や餅つきなどの行事を通じた交流が図られている。これは「田吾作」の理念、「山都共生」を具現化したものとなっている。

また、JA愛知東が主催する管内（新城市及び北設楽郡）の小学生を対象とした「こども農学校」も当地において行われているほか、やまびこの丘主催の「親子田植え体験」も行われている。

隣接する海老地区とは、海老地区委員会（海老地区と連谷地区からなる自治組織）を通じて、行事開催時の資金面や労力面での協力を得ている。

なお、全国棚田サミットの生みの親ともいえる劇団「ふるさときゃらばん」とは、平成6年の千枚田写真展以来、現在まで親交が続いている。

4 むらづくりの農林漁業生産面への寄与状況

ア 農林漁業における生産面、流通面の取組み状況

千枚田の1枚あたり平均面積は86㎡であり、生産力の向上は望むべくもなく、また、農作業も大型機械に頼ることができないため、多大な労力を要することとなる。多くの人手を要する作業を行うため、田吾作や河西さんグループ、稲作プロジェクトチームなどの組織の協力を得て千枚田の維持を行っている。

なお、河西さんグループは食の安全・安心を目指し、有機無農薬での米作りに取り組んでいる。

また、「千枚田米」ブランド確立に向けて取り組んでいる。

イ 認定農業者や集落営農等担い手の状況

認定農業者や集落営農は当地区には存在しないが、四谷の千枚田を守り、維持していく担い手が地元の有志の人たちであり、その担い手をサポートするのが支援グループの人たちである。

ウ 新規就農の状況や女性、高齢者、NPO、企業等の参画状況

世代間や地域内の結びつきも強くなっているため、定年退職者が農地を守るためにUターンしたり、千枚田の魅力に取り憑かれIターンして耕作している。(直近3ヶ年でUターン2名、Iターン4名)

農家の奥さんたちで直売所グループ「棚田っ娘」を結成している。

エ 農地の利用集積、耕作放棄地の解消等の状況

耕作放棄地の解消には、地元農家を始め「田吾作」の人たちや支援グループの人たちの力を借りて行っている。

連谷小学校の総合学習で千枚田の枚数を数えたところ、耕作放棄地があったので、その原因を調べて、耕作放棄地解消のために学校田として耕作している。

オ 加工・販売等の経営の多角化、環境保全型農業への取組、食品産業との連携状況

イベント開催時に地元で獲れた米を使っの五平餅や地元の農産物の販売を行っている。地域で獲れた米は地元の人やイベントにくる都会の人たちが食べるために減農薬栽培を行っている。

カ その他地域農林漁業の持続的発展のための取組(経営の改善)

耕作放棄地の解消と発生を防止し、集落の多面的機能を図ることを目的に中山

間地域直接支払制度で集落協定を策定している。

5 むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

ア 生活・環境整備面の取組状況（生活環境施設の整備、安定的な就業機会の確保、生活条件の改善、定住の促進など）

日本棚田百選に選ばれるなど知名度が上がり、地区住民などによる草刈りや周辺道路付近の立木の枝打ちや伐採などの環境整備活動が行われている。

イ 地産地消及び食育の推進、都市住民との交流等の状況

地元の連谷小学校は全校生徒11名の小さな学校であり、総合学習の時間に「千枚田に学ぶ」というタイトルで、代かきから田植え、稲刈り、脱穀まで体験するとともに、収穫したもち米で餅つきをして、一人住まいの高齢者や敬老会、両親祖父母の3世代など校区の人たちに子供達が手書きの招待状を出して、千枚田を通じた世代を超えた地域交流を行っている。食についての様々な知識を教えるだけでなく、地域の住民も学校田での作業を手伝うなど、地域内のコミュニティ活動の強化にも役立っている。なお、この様子は連谷小学校のホームページ（URL：<http://academic2.plala.or.jp/renkoku/>）に公開されている。

また、浜松市の三ヶ日中学校が宿泊体験学習の一環として、田植え体験と千枚田で収穫したミネアサヒのおにぎりの試食を行ったり、不登校の生徒を受け入れている黄柳野高校の生徒たちに野外学習の場を提供するなどの活動も行っている。

平成17年度からは、地元農協JA愛知東がJA管内の小学生を対象とした「こども農学校」を開校し、四谷の千枚田において田植え体験や月2回の管理作業、稲刈りなどの農業体験実習を行っている。

さらに、やまびこの丘とも連携し、一般公募による「親子田植え体験」や「千枚田散策会」、棚田内のビオトープを利用した「自然観察会」を開催している。18年度は新たに『新・体験交流ガイド「みんなの奥三河」』と題し、田植えに加えて山里の食体験や自然観察、稲刈りなども体験させるとともに地区住民との交流会も予定されている。

近くには東海自然歩道が通っており、美しい棚田の景観を見ながらのウォーキングが都市部からの要請で開催され、保存会理事が棚田や地域の自然について説明し、「棚田っ娘」が五平餅を提供するなどして交流を図っている。

ウ 地域資源（土地、水、自然環境、景観、歴史・民俗文化）の保全・活用やコミュニティ活動の強化等の状況

地域資源である四谷の千枚田を、支援グループの力を借りながら保全している。当地には、地元盆行事「はねこみ」が古くから伝承されており、この地域のまとまりの良さが良く現れている。また、「仏坂ふりくさ道」の石仏群など古くからの石仏が多数残っている。

連谷校区は小さな単位であるので、地域と小学校と一緒に運動会などの行事を開催している。子供たちは地域探訪の時間に親子で地域の歴史文化などの多くのことを学んでいる。

エ 女性の活動、高齢者の生きがい活動その他多様な主体の参画した活動状況
女性の活動も活発で、直売所グループ「棚田っ娘」を結成して農産物の直売や五平餅を販売して、都市住民の人々との交流を図っている。

地元の敬老会は地元盆行事「はねこみ」の伝承や「仏坂ふりくさ道」の石仏群の清掃活動などを行っている。

高齢者は稲作体験や連谷小学校の生徒に案山子作りの指導などに生きがいをもって取り組んでいる。

オ その他地域の生活安定・向上のための取組み

イノシシやサルに対する鳥獣害対策として地域全体でえさとなる野菜クズや生ゴミなどを除去し、田周辺の草を刈り、耕作放棄地の解消にも努めている。

6 むらづくりに関する所見

(1) 棚田の保全管理

地域資源である棚田を支援グループの力を借りながら維持して、農作業や各種行事を通しての都市の人との交流により、棚田の保全管理に努めている。

(2) 地元小学校やJ A等との連携で食育推進を図っていること。

地元連谷小学校での総合学習の時間やJ A愛知東の「こども農学校」において、田植えや稲刈り等の体験をさせることにより、子どもたちに食に関する様々な知識や経験を与えている。

また、小学生だけでなく、中学生や高校生にも年齢にあった体験の場を提供し、食育の推進が図られている。

(3) 都市住民との交流を通して耕作放棄地の解消と発生防止を図っていること。

地元だけでは耕作の手が足りないため、都市住民の支援グループの協力を得ながら耕作放棄地の解消や発生防止を図っており、支援グループが作業に訪れ

る際には様々な交流がある。

(4) 子どもから高齢者まで老若男女を問わず活動していること。

小学生は総合学習で稲作を体験し、地元女性は直売所を運営、敬老会は石仏群の清掃作業、お助け隊は力仕事など、様々な組織ができる範囲のことを無理なく行い、互いに連携して活動することで、地域内や世代間の交流が活発となっている。

併せて、こうした活動の中から地域への愛着が育まれ、定住促進にも繋がっている。